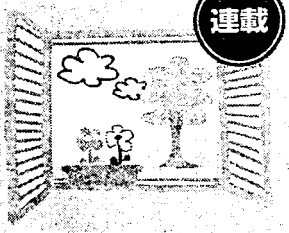
連載



精神障害者から見た人々

Vol.1

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

神奈川県　警察官　小高藤安さん（42歳）

「小高さんは警察官らしくないですね」と新聞記者のA君は語り、「そうね」と私は答えた。A君と私とでは世代も立場も異なるので、いつか"警察官らしさ"について他の記者たちも交えて意見交換したいと思う。

小高さんは私からみて営業マンタイプ。それもそのはず。3月まで神奈川県警本部の広報県民課に在籍していた。私が県警の人々を実名で書きたいと思って取材申し込みをした時に「取材はお引き受けしますが、今後の広田さんの活動のためにきちんと広報課を通されたほうがいいですよ」と言った人がいた。

そして県警本部の親しい人の紹介で出会えたのが、週刊誌やテレビ等の報道に対応していた小高さんだった。当時、不祥事でたたかれた県警のイメージアップのため、小高さんは奮闘していた。暴走族の取り締まり、ひき逃げ事件捜査、少年非行の防止など、日頃知られていない地道な仕事を一生懸命、県民に伝えていた。

小高さんに取材したい人の名簿と私が書いた警察関係の文章を送ったところ「ご本人の了解があればいいでしょう」となった。

その小高さんが警察署の生活安全課長として、5月に町内会・老人会・交番連合協議会の主催で"ワールドカップを前に地域の防犯"というタイトルで講演することを知り、広報課にも連絡して取材させてもらった。

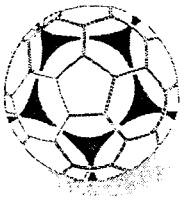
「管内で、ひったくりが多発していますので、バッグは歩道側にしっかり持ち、自転車の前かごには目立つ色の網をかけて防ぎましょう。被害者の80%は女性と老人…」などとてもわかりやすく、にこやかに話していた。

聞いていた人々は中高年の女性が多かったが、講演とそれに引き続いて行われた交番のお巡りさんと小高さんの部下にあたる女性警察官による実演に、「あら！」とか「まあ！」と言いながら身を乗りだしていた。

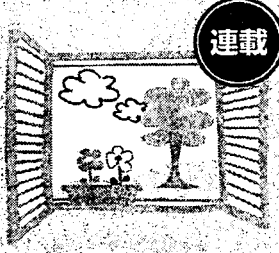
「ワールドカップが近づくと警察はますます忙しくなりますので、みなさん！くれぐれも被害に遭わないよう気を引き締めて暮らしてください。犯人は"元気がないように見えた人を狙った"と語っています。…ところで、今日は○○で育った精神障害者で…の広田和子さんがみえています。広田さん！どうぞお立ちください」と小高さんは会場の人々に私まで紹介してくれた。私は「おはようございます。広田和子です。よろしくお願いします」とあいさつすると、何人もの人が、帰り際に私に会釈して行った。

6月9日のワールドカップ日本対ロシア戦に引きつづき、6月30日決勝戦が行われた横浜国際競技場周辺に行ったが、多くのサポーターが行きかい、大勢の警察官が出動していた。

県警は県外からの応援部隊も含め7400人を投入して県内を警備し、県下53全警察署では外で警備にあたった人をのぞき、署長以下ほとんどの管理職が出署していた。県警警察官の定員は1万4136人なので、その意気込みを肌で感じつつ、雑踏の中で小高さんの講演はタイムリーだったと思った。



連載



精神障害者から見た人々

Vol.2

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

東京都　新聞記者　築山英司さん（36歳）

神奈川県の職員から「こちら、精神障害者でバンド活動もしている広田さん！」と'90（平2）年夏に紹介されたのが築山記者との初めての出会いだった。

築山君は「今度バンドの練習日におじゃましていいですか」と聞いたので、私は「どうぞ」といった。そして、練習日にカメラを肩からさげた築山君が「こんにちは！」とさわやかに登場した。私は「ちょっと！　写真を撮るつもり？　まさか取材じゃないわよね」といった。

築山君は「取材のつもりで来ましたがいけなかったでしょうか？」といったので、私は「あなた、今までに精神障害者を取材した経験はあるの？」と聞いた。築山君は「いいえ、新米記者でして、精神障害者に会ったのは、広田さんが初めてです」と答えた。

「来てくれたのはありがたいけど、私たちのこと何も知らないで、いきなり取材といっても、それは困ります」と私はいった。築山君は「じゃあ、今日はみなさんのお話を伺い、勉強させていただきたいのですが」といったので、私がメンバーに聞くとみな了承した。

こうして築山君は練習の合間に、メンバーの話を聞いて「広田さん！　とても勉強になりました。あらためてぜひ取材させていただきたいのですが？」といった。私は「わかりました。ていねいに話も聞いてもらったので、次回は…で出演しますから、その時にでも」とメンバーの意見を聞いて答えた。

9月15日、司会の私は取材されていることを意識しないで生出演を終えたが、築山君が「ところで、広田さん、仮名がいいですか？　実名でいいですか？」と聞いた。その言葉に私は驚き、「え！　写真が出て、バンド活動が記事になるのに、なんで仮名なの？」といった。

やがて新聞が送られてきたが、名前は仮名になっていた。築山君は長い手紙に「私は実名で、と強く主張しましたが、力がなくて…」と書いてきた。後日、横浜支局の近くへ出かけた私は、ついでに築山君を訪ねた。「広田と申しますが、築山君いますか？」と私は言った。

中年の男性が「私、支局長の田中です。実は、あなたのことを築山がデスクに"実名で"と強く主張していました」といった。私は「…なぜ仮名だったのですか」と聞いた。支局長は「だって実名を出したら、"なぜ精神障害者を実名で出しちゃったの"と読者に思われてしまうじゃないですか。ところで広田さん、築山は見込みのある奴ですから、育ててやってください」といった。

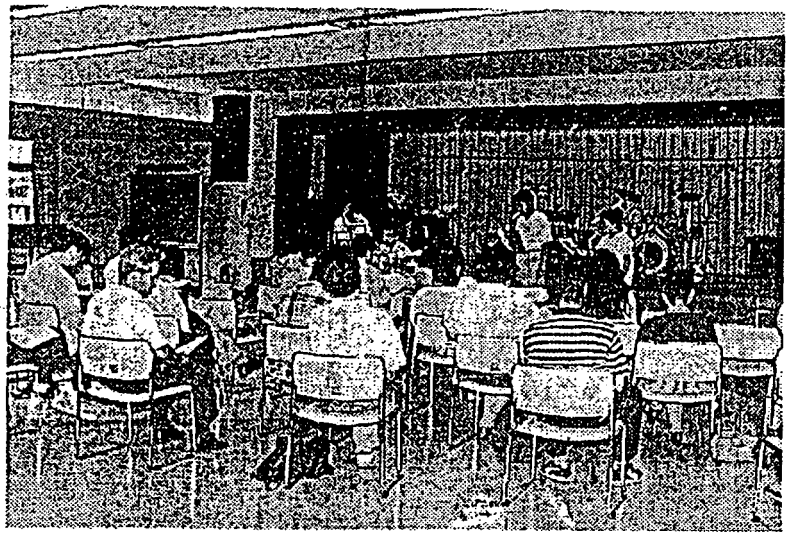
翌日、築山君から電話をもらったので「おたくの田中さんは…精神障害者に対してはとんでもない偏見の持ち主ね」というと「支局長を責めるのは酷ですよ。実はあの記事は、東京本社で論議した結果です」と教えてくれた。

その後、築山君の希望で精神科病院を案内したこともあり、転勤後もずっと築山君は精神障害者の問題に関心を持ってくれている。築山君の"仮名記事"がなければ、私はマスコミの偏見に気づかなかったが、その偏見をつくり出しているのが、精神科救急の未整備など精神障害者施策の貧困さだと今では痛感している。出会いから11年後の昨年12月、私は東京新聞の"この人"に載った。書き手は厚生労働省記者会の築山記者。

９０年９月２３日　東京新聞

〝贈る言葉〟に思いを込めて

明るく羽ばたく障害者のバンド



らくらくバンドのコンサート。雨のなか三十人ほどが集まった＝横浜市戸塚区で

音楽好きの、どこにでもありそうな平凡なサークル。だが彼らの演奏には、自らの人生の賛歌と願いの思いが込められ、聴く人の心を動かさずにはいられない。その名は「らくらくバンド」。おそらくは他に例の少ない精神障害者の音楽サークルだ。彼らは燃えていた。ギター、フルートの生演奏で「贈る言葉」、ジャズのスタンダード曲「オール・オブ・ミー」など十曲を演奏。集まった三十人が一緒に歌い、手拍子で合わせるなど、二時間のステージは盛り上がった。

バンド結成は三年前の夏。県内の精神障害者作業所の合同キャンプでギターやフルートを持ってきた十人が即席で「戦争を知らない子供たち」などを演奏、一緒に歌って好評だったのがきっかけだ。以来年齢、職場の垣根をこえて音楽好きが集まり、今では十六人も。今回は時間のあいていた四人が一週間前からの特訓の成果を見せたのだ。

コンサートが終わり、進行役のA子さんが最後に「雨の日で足元が危ないですから、滑って転んで体と精神の二重障害者になったら大変。気をつけましょう」と軽い調子でしめくくった。その直後のことだ。烈火のごとく怒った身体障害者が舞台に詰め寄った。

「そんなに軽はずみに言うな。あんたは障害のことがわかっていない」

「ごめんなさい」と素直に頭を下げるA子さん。彼が怒りをぶちまけて帰ったあと、A子さんはぽつりと言った。「身体障害者の人は偉いわ。浴びせられた言葉に堂々立ち向かっている。その点私たちは、陰口に対してなかなか反論できないもの」「私たちは周囲からの同情や気遣いはイヤ。私たちももっと強くならなくちゃ」

らくらくバンドがよく歌う曲の中に「贈る言葉」がある。「この歌は武田鉄矢さんが私たちの気持ちを代わりに歌ってくれたような気がします。例えば自分が障害を持っていることを親しくなった人にいつ話すか非常に悩みます。信じて話したら逆に遠ざかる人もいる。でも私たちは歌の言葉の方を選びたい」――A子さんの言葉に続けて四人は歌った。

信じられぬと嘆くよりも人を信じて傷つく方がいい――。

らくらくバンドは十月六日も桜木町駅前の健康福祉会館のステージに立つ。もちろん「贈る言葉」も歌うつもりだ。

（築）

９０年９月１５日　サンライフ横浜にて

連載

精神障害者から見た人々

Vol.3

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

神奈川県新聞記者　佐藤奇平さん（30歳）

2001〈平13〉年6月8日午後。日本中の精神障害者が悲しみに沈んだ大阪児童殺傷事件。この事件が起きたことを佐藤君からの電話で知った。佐藤君は、その時点で、そして現在も、全国の地方新聞社の現場で働いている中で、精神科救急の課題をトップクラスで理解している記者。

出会いは、"98年の秋。私が"不登校・中退生のための生き方探検"の主催者として、彼ら彼女らの夢づくりのきっかけに、と神奈川県警伊勢佐木署・横浜市消防局・横浜港郵便局・横浜市交通局等々、中卒で就職できる職業について職業人の協力を得た催しを多くの県民に知ってもらいたくて、こちらから神奈川新聞に電話を入れた。

佐藤君は当時遊軍記者。遊軍とは、県警記者クラブ、司法記者クラブ、県政記者クラブ、市政クラブ等のどこにも所属せず独自のテーマを取材して報道する人。こうしたことは佐藤君の先輩にあたり、10年以上の交流があるAさんに教えてもらった。Aさんはいつも言っている。「奇平はいいよ。あいつはね…」競争社会と思われるマスコミにあって、これほど後輩を評価している話を聞くと、聞き手がいい気分になる。

そのようなこともあって、24時間精神科救急医療システム、24時間相談窓口の必要性を私が佐藤君に語りだしたとき、患者・家族、そして救急隊・警察署と、すべての人が困っていることをすぐ理解してくれた。

その後、24時間精神科救急を考える集会の記事を書き始めてくれたのを皮切りに、独自の取材を開始して、衛生行政に切り込んでいったと思われる。県衛生行政関係者は「佐藤記者は何なの？　あの人はイヤだ」と私に言った。衛生行政がそれまでマスコミの取材を受けるのは、精神科病院の不祥事等で、精神障害者施策について正面から取材を受けたことがなかったための力量不足だと思う。私がアクティブに発言したことで、横浜市衛生行政関係者が私を委員からはずすこと等を考えたりした旧態依然とした体質が、ストレートな佐藤君の取材姿勢をうまく受容できなかったのだと私は捉えている。

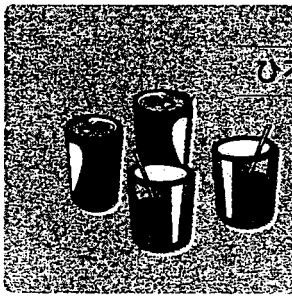
"精神科医療を普通にしよう。他の病気と同様に24時間安心して救急車で利用できるようにしたい"そうした当たり前の施策を実現させるために、佐藤君はジャーナリストとして掘り下げた取材をしてガンバッテくれた。

何度もレビューに書いているように、福祉や医療を必要としている人が警察に保護されている現実。それが警察と精神障害者の関係を不幸にしていると私は考えている。

一方で、マスコミの新人記者は県警記者クラブに配属され、最初の仕事は警察回りからスタートする。そこで保護されている精神障害者を見ることもあれば、保護された人のことをいう「マル精」とか「MD」（メンタルディスオーダーの略）という警察の無線用語をおぼえる。

そうした新人記者時代の精神障害者に対する偏見を、その後もずっと持ち続けてしまうと、身をもって知っている佐藤君は、そのマスコミの一員として、"精神科救急"の課題をずっと追ってくれた。

2002〈平14〉年9月、本社から支局へ佐藤君が転勤したときに私は、「奇平ちゃん！　パパラッチにならないでいつまでもジャーナリストでいてね」と言った。



ひろたかずこ

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
壁と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

連載

精神障害者から見た人々

Vol.4

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

大阪市　新聞記者　千葉光宏さん（43歳）

「自分の記事で広田さんの人生が悪い方向に変わるかもしれないと思い、常にまして慎重になった」と千葉ちゃんは後日しみじみ言った。

出会いは94〈平6〉年秋で、自己紹介程度のあいさつだけ。二度目は神奈川県の患者会のAさんから「広田さん！朝日の記者が全家連で俺たちの話を聞きたいと言っているので一緒に行こう」と言われ、行ってみると千葉ちゃんたちがいた。

同席者は東京の患者会仲間や当時、全家連資料情報室長の桶谷さんで、Aさんと私が席につくと、千葉ちゃんが「実は青物横丁事件*を受けて、精神障害者の報道をどうしたらいいのか？みなさんの生の声を伺い、取材したいと思っています」と言った。

私は、「90〈平2〉年に東京新聞に…バンド活動で記事が出たらA子さんとなり、後日、記者から記事より長い手紙が来て、〝本人が実名でいいといっても新聞社の都合で匿名にするし、匿名にしてほしいといわれても新聞社の都合で実名になる…力不足で…〟と書いてあった。マスコミが精神障害者を匿名で扱うのは、本人の人権を守るというより、実はマスコミの精神障害者に対する偏見でしょ！」と言った。

その後、マスコミの入通院歴報道について意見発表したときに、千葉ちゃんの姿があって、95〈平7〉年に入ると取材を申し込まれた。千葉ちゃんがかつて精神病院のことを取材した経験があり、インタビュー記事なので原稿をチェックできることを知り、取材を受けることにした。「顔写真と診断名も出したい」という千葉ちゃんの希望も了解した。

2月13日に「明日の朝刊に載ります」と原稿がFAXで届き、私一人の記事になったことを知った。

翌日の朝刊を見て、私は激怒した。確かに〝病歴を書かないで〟というタイトルが示す通り、私の主張が記事になっていたが、私が知らなかった囲みのメモが3か所あった。

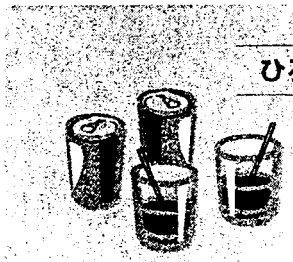
その1か所に94〈平6〉年版犯罪白書を引用し、「…罪名別では、精神障害者以外に比べて放火や殺人の比率が高い。…」と出ていた。これはまったく私の予期せぬ出来事で、千葉ちゃんに電話で「私は命がけで出たのに、何であれを出したの」と怒った。

千葉ちゃんは「偏見の背景には、精神障害者の放火や殺人が多いという事実があり、そのことはきちんと示した上で読者に再考を促すべきだと思って出した」と答え、後日手紙で、「…広田さんに指摘されて、あらためてよくよく考えましたが、考えは変わらない」と書いてあった。あくまで病歴報道が偏見を生むと主張する私と千葉ちゃんの考えは今でも平行線のままだが、二人の信頼関係にもとづく交流は続いてきた。

一昨年の池田小事件が起きて大問題の心神喪失者等医療観察法ができようとしている今、精神障害者による殺人の被害者の多くは家族で、放火は自殺未遂による自宅への放火であるという実態をあのときに突き止めていれば…と思う。

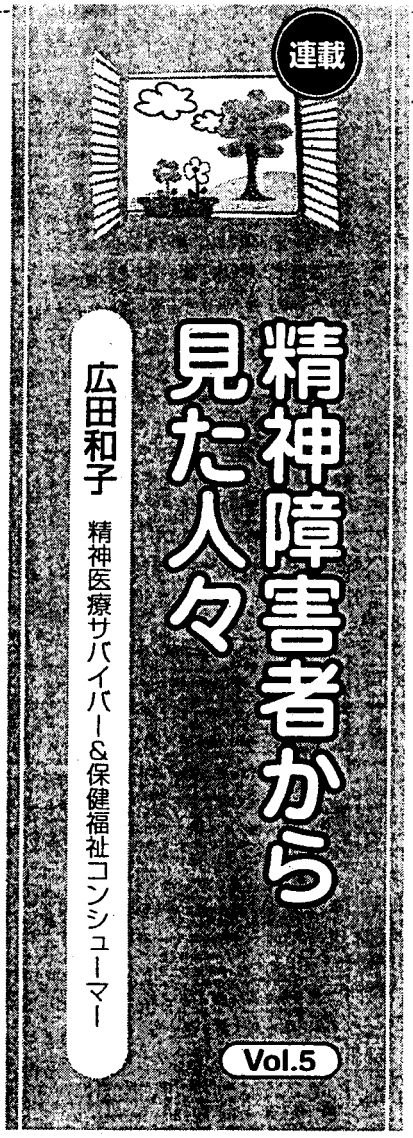
病歴報道については、千葉記者による私のインタビュー記事の後、社会部長が見解を書き、朝日新聞は病歴報道をやめることになった。

*東京都内の青物横丁駅で94年10月25日朝に医師がトカレフで射殺された。容疑者に精神科の入院歴があったことで、時間経過と共に報道機関により匿名、実名と分かれた。朝日新聞は指名手配時は匿名で、警視庁が公開手配に踏み切った時から実名を通した。匿名→実名→匿名と変えた新聞社やずっと匿名のところもあった。



ひろた かずこ

かつて私は主治医に“文章を書くのが好き”と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。



神奈川県 警察官 山口浩之さん（42歳）

'98（平10）年夏。〝不登校・中退生のための生き方探検〟の主催者として協力要請を快諾してくれた神奈川県警伊勢佐木署に生活安全一課長の五味さんを訪ねた時に「私は…精神障害者でして…」と自己紹介した。

すると五味さんは「広田さん！　署の保護室で精神の人を保護していますが、早急に医療的保護を受けないで患者さんの人権にかかわりませんか。患者さんがかわいそうだ。なぜ24時間精神科救急医療はないのですか」と言った。

長いこと私は精神障害者を取り巻く業界の中で「警察が精神障害者を治安の対象者とみている」と聞いていたので、五味さんの立場での言葉にカルチャーショックを受けた。

その頃の私は自宅等における相談活動からでてくるニーズとして横浜市障害者施策推進協議会の中や、神奈川県と市民団体との話し合いの席上で、24時間精神科救急医療システムと相談窓口の確立等を要望していたこともあり、あちこちの交番や警察の人から実態を聞いて学んだ。

'99（平11）年5月。のちに法務大臣を務めた保岡代議士の勉強会に、私は〝精神医療サバイバー〟として出席を要請された。他の出席者は厚生省（当時）の部長と課長。法務省の刑事局長と法制課長。著名な司法精神医学者などなど。

その時に私は〝これは触法精神障害者の勉強会だ。その前にすることがある。多角的に勉強しなければならない〟と思って、五味さんに「…警察と精神障害者の関係をきちんと学びたいので、本部の人を紹介して…」と依頼した。

そして出会ったのが、県警本部生活安全対策室の山口さんだった。山口さんは「…警察署にいた時、多くの患者さんやご家族がみえましたが…」と絶句され、私はびっくりした。

その出会いをきっかけに私はより多くの警察官の話を聞いたり、山口さんとの電話でのやりとりが始まった。そこで私は改めて警察が医療を必要としている人々に対応しなければならない現実に疑問を感じた。

'99（平11）年秋。横浜市消防局救急課の吉村さんと県警本部に山口さんを訪ねた。三者会談を受けて私は関係資料を吉村さんと山口さんに送った。やがて衛生行政関係者のAさんが「広田さん！　山口さんにつっこまれますので資料を渡さないでください」と言った。他方、関係者のBさんは「県警と県、横浜・川崎両市との話し合いで山口さんが『患者さんがかわいそうだ！　警察がやらざるを得ない状況の中でやってきたことが、24時間精神科救急を遅らせた』と言われて責任を感じた」と語ったが、私も山口さんとまったく同感だった。

2000（平12）年春。衛生行政関係者たちから、山口さんが移送（警察官通報を受けて医療機関まで衛生行政が移送する条文）にかけている、と聞いて、山口さんに聞いたところ「…移送ができれば、衛生行政は身近なソフト救急もやらざるを得ない」と答え、秋には警部になるべく警察大学校へ入学していった。

その後、県警と衛生行政の話し合いの中で、昨春、24時間移送制度がスタートし、今春には土日だけだがソフト救急医療が24時間化した。しかし現実課題は山積み状態だ。横浜市こころの健康センター所長の勝島さんは言っている。「山口さんの熱意には感動しています。また一緒に仕事ができれば」と。山口さんは本部にいた時、常に県民と警察の現場を思う人だった。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に〝文章を書くのが好き〟と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。

連載

精神障害者から見た人々

Vol.6

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

神奈川県　消防職員　吉村友一さん（40歳）

'03〈平15〉年3月。前号で紹介した山口さんの元上司だったAさんは、転勤を目前にし、県警本部生活安全対策室の応接席で「移送（精神保健福祉法29条の2の2）という法律ができたこともあったけど、広田さんが居たから、24時間精神科救急がここまで進んだ」と語った。'00〈平12〉年夏、本部に山口さんを訪ねたとき、「新しい上司のAです」と紹介されてから2年半の月日が流れていた。そのAさんの言葉と同様の話をしたのが横浜市消防局救急課に在籍していた吉村さんで、あるとき「広田さんが救急課に来たから、横浜市救急課はオフィシャルに精神科救急を話し合うようになった」と言った。

救急課を私が訪ねたのは、これまで本誌にも書いてきたように、なぜ医療を必要としている人が警察に行っているのか？　救急隊はどうなっているのか？　という単純な疑問からだった。

'99〈平11〉年夏、救急課で出会ったのが吉村さんで、救急隊も精神障害者を搬送していることはわかった。その後、県警の山口さんと救急課の吉村さんと意見交換していく中で、私は〝これは3人が直接会って、意見交換したほうがいい〟と思った。その年の秋。山口さんと吉村さんに私は「…それぞれの立場でざっくばらんに意見交換したい…」と提案したところ、山口さんより「…上司が執務時間内に本部へ来ていただけばと言っている…」と電話があり、その言葉を吉村さんに伝えたら、「…行きます」ということになって2人で県警本部へ行った。

三者の意見交換は午後2時から5時ごろまで、3時間に及ぶ長さだったが、こうした三者会談は全国で初めてのことだと思う。吉村さんは県警本部を出た後も、「いやー、精神障害の人は受診先がなくて救急隊も大変だけど、本当に警察さんも大変だ」と言っていた。

'00〈平12〉年春。市民団体で精神科救急の講演とシンポジウムを開催するため「吉村さんに出てほしい」と依頼したところ「浜岡課長が精神科救急に熱心なので依頼を…」と助言された。

シンポジウム当日、浜岡課長は統計をもとにていねいに精神科救急の実態を語り、受診先がなく救急車が立ち往生する例もあげた。シンポジウムが終わると吉村さんは「課長！　広田さんはすごいおばさんでしょ！」と私をほめてくれた。このときの浜岡課長の発言を受けて私は、「精神科も救急車を呼んで…」と、より一層あちこちで発言した。

さらに、翌'01〈平13〉年夏。今度は吉村さんがシンポジストで出てくれたが「広田さんが私を呼んだのは率直な話を期待して…」と切り出した。その後、'02〈平14〉年に本誌特集に〝精神科救急の実態に迫る〟を書くときに救急課を訪ねたところ、浜岡課長の指示で吉村さんは'00〈平12〉年の救急隊が搬送した件数と対応に要した統計等を用意してくれていた。

'03〈平15〉年春。吉村さんは転勤の知らせを自宅から電話でくれた。「これからも救急課の平中さんや新しい課長、みんなと仲良くね」と言われ、私は「本当にありがとう…」と言った。

横浜市救急課の人々との交流の中で、私は救急行政が全県一本ならば、救急車でいくソフト救急システムができたのではないかと思う。ソウルでも台湾の台北でも救急車による精神科救急が24時間稼働していた。社会的入院者の存在と共に精神科救急の受診先がない現実がある。これはすべての人々にとって人道上の問題だ。

ひろた かずこ

かつて私は主治医に"文章を書くのが好き"と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。